

令和元年度 第2回ナセBA運営協議会議事録

1. 開催日時 令和2年1月29日(水) 午後3時30分～午後5時

2. 開催場所 ナセBA 1階 体験学習室

3. 出席者

(委員)

我妻 仁(我妻社会保険労務士事務所・協議会会長)

北口 己津子(米沢女子短期大学・協議会副会長)

佐藤 繁(米沢市芸術文化協会)

大類 雅子(米沢市芸術文化協会)

津山 真由美(中部コミュニティセンター)

小嶋 千夏(主婦)

(事務局)

公益財団法人米沢上杉文化振興財団

種村信次(理事長)、岸順一(副理事長兼図書館長)、菅野智幸(常務理事兼事務局長)、青木昭博(主幹)、遠藤朋香(図書業務担当)、齊藤かおり(図書業務担当)、福石敏史(図書業務担当)、川橋勇人(総務企画担当)

欠席者

太田 和広(米沢市立関根小学校校長)

加藤 公一(米沢市第三中学校校長)

佐藤 正(米沢工業高等学校校長)

白田 静雄(地元商店街)

4.開会(事務局)

5.あいさつ(理事長)

今回が今年度第二回目ということになるが、最近の入館者状況等を見ると、11月から昨年度を上回る数値が出ており、スタンプラリーや英語多読といった、他にない新たな取り組みの結果ではないかと思っている。今後とも前例を上回る入館者数を記録していきたい。

また、県立図書館もリニューアルオープンが行われる。一度見てみたいものだと思っているが、皆様方にも機会があればぜひご覧いただきたい。

図書館事業については、皆様から貴重な意見をいただいております。今回その実施報告をさせていただくが、今回でもまた皆様よりご意見を頂戴し、それを消化して取り組んでいきたい。

当運営協議会は本年7月までが任期となっているが、2年間皆様方に大変ご支援・ご協力を頂いてきた。心から感謝申し上げたい。

6.議事

1.報告

1) 第1回ナセBA運営協議会の意見要望に対する取り組みについて(報告)

- (大類委員) ティーンズサポーターのように、直接本を読むだけでなく、栞づくりといった様々な方向から本に親しむということはとても良いと思う。私も去年、『星の王子さま』の朗読と併せて星に関連する歌を歌うという、音楽を通して本に親しむ催しを行った経験があるが、そうした異なる物事から本を読むことへのアプローチを行うことも効果的であると感じている。
- (小嶋委員) 入館者数の安定については、一つ一つの取り組みが形となっているものと思われ、素晴らしいことと感じている。小学生へ向けたスタンプラリー、高校生のサポーターの活用といった多岐にわたる取り組みといったことについては、多くの方々に利用してもらえよう、継続して行ってほしい。
- (佐藤委員) サポーターやボランティアの拡充については、新たな図書館利用に向けたひとつのアクションになっているかと思う。特に、若手の方のボランティアへの参加意欲は教育の現場から見ても年々高まっており、そうした方たちの活動が新たな利用者呼び込むことにつながるのではないかと思う。スタンプラリーについては、意欲的な児童や保護者が多く、これをきっかけに初めて図書館へ来た子もいた。スタンプを集めて景品をもらうという楽しさもあるが、それを通して図書館のすばらしさを知り、リピーターとなるといった点で非常に効果があったと思う。初年度のため不備もあったが、そうしたことを念頭に組み込むと活用の推進や学校との連携もスムーズにいくと思うので、ぜひ継続してほしい。
- (津山委員) 取り組みの中のTwitterの導入については今回初めて知った。HPと共に見やすく、こまめな発信がなされているように感じたが、投稿して即座に反応があるようなことはあるか。また、特集コーナーに関しては報告にあった壁面書庫のエッセイ特集が魅力的に感じた。サポーターについては、一般のサポーターや、ティーンズサポーターの方々の活動が貸し出し数の増加につながっていることがよく分かった。障がいを持つ利用者の方への対応として配布しているというリーディングトラックにも強く興味を感じた。選書等における担当制についても、スキルアップをして頂いており感心している。
- (事務局) Twitterについては、月3回のおはなしかいにおいて当日の内容紹介を行った際に大きな反響を感じた。特集コーナーの壁面書庫のエッセイについては、実際に壁面に行って本を読みたいという声が多いものの、バックヤードツアーでも見学にとどまり書庫の本を手にとってもらう機会がなかったこともあり企画された。アンケートや皆様の声を反映した特集づくりを意識して行っている。
- (北口委員) 壁面書庫の特集については、私も壁面書庫に関心があったので良い特集と感じた。資料の古びた感じやエッセイという題材も、長く保管されてきた資料という懐かしさを感じた。障がいを持つ利用者への対応についてはユニバーサルの視点が良いと感じた。授業でも障害を持つ利用者対応について取り上げることがあるが、特に学生の関心が高いのはLLブックであった。ナセBAにも所蔵があるかと思うが、一方で一般に理解がまだ進んでいないものであること、また刊行冊数もまだ少ないものであるため、理解促進のためにもぜひ今後の特集において取り上げて欲しい。現状に満足せず、次々に新たな企画等も実施する姿勢が今後につながっていくと思う。

(我妻委員) 私も図書館を利用するが、やはり最近は親子連れを含めて利用者が増えてきているように思う。特集コーナーについてもいつも楽しみにしている。蔵書の中に読まれていない本もあると思うので、そうしたものを特集してもよいのではないか。

(事務局) LL ブックについては、少ないながらも図書館に所蔵があり別置したいと思っているもののスペースの部分で課題が残る。借りられていない本の特集に関してはすでに何度か行っており、この特集を通じて借りられた本なども存在している。

2) 令和元年度 公益財団法人米沢上杉文化振興財団運営中間評価について (報告)

(小嶋委員) 評価項目内にある「ファンクラブ」とはどういうものか。また、「利用者の声を集め、反映する」という項目について、アンケート等は行っているか。

(事務局) 財団全体での評価項目のため、こちらのファンクラブは米沢市上杉博物館のもの。年会費を頂くことで博物館の展示や置賜文化ホール事業の入館料が割引となる。

アンケートについて、講座や展示など、各事業のアンケートは行っているが、図書館内でのアンケートは各所に設置しているタイプの物であり、利用者に直接お渡しする形式のものは実施できていない。この方式でのアンケートの実施については、明確な方針やねらいを持ったアンケートにしていく必要があると考えている。

(小嶋委員) 利用者の声や満足度を図ることは非常に重要であると感じている。国立国会図書館では毎年アンケートを実施している。今後の取り組みとして国立国会図書館のスタッフをお呼びしての研修を行うとあるが、こうした点についても話を聞いてもよいのではないかと思う。また、グーグルにはアンケート作成サービスがあり、QR コードからアンケートを記入してもらうことができる。集計も自動で行われるので、件数の多いアンケートに関してはこうしたものを活用することも検討してもらえればと思う。

(大類委員) ウッディコンサートについて、既に内容が決まっているものはあるか。

(事務局) 10月22日の開催については、同日ギャラリーで行う秋山庄太郎展と併せ、秋山氏と懇意にしていたピアニストをお招きする予定。それ以外の回については検討中。

3) 令和2年度 市立米沢図書館・よねざわ市民ギャラリーの開催予定事業について (報告)

(我妻委員) 来年度事業における小学校巡回文庫について、配本から回収までの期間が空くのは配本先に本を保管してもらっているという解釈で良いか。また、配本された本の設置はどのようなところで行っているか。

(事務局) 配本・回収についてはその解釈で間違いない。25冊を1パッケージとして、配本先の規模に合わせた数を配本する。設置場所については各学校の裁量にお任せしており、こちらでは配本まで行う。調べ学習に使用する場合や学校図書館への設置、パッケージをクラスごとに巡回させる方法をとっているなどの事例がある。

(我妻委員) 旧館の図書館で書庫を案内していただいた際、古新聞の所蔵を見たが、現在も日付を指定して閲覧することなどはできるか。

(事務局) 当館では山形新聞・米沢新聞・朝日新聞を原紙保存しており、一定期間以上古いものは金池の文化センターで保存している。閲覧の申請があった場合には一定の日数を頂き、文化センターから運搬して対応している。

4) その他

(佐藤委員) 内部評価について、図書館カード利用による博物館来館者数に関する項目の評価が非常に低い。財団において、双方の施設利用増を目的とするうえで有効な取り組みであると思うが、どのような改善が考えられるか。

(事務局) ご指摘の通り、図書館と博物館双方の利用者増につながるものであると思うが、実際の利用者はごく少ない状態にある。対策としては両館における PR の徹底が挙げられる。

(小嶋委員) 昨年度、子ども読書活動推進委員に参加した。今回のテーマは「家読」であったが、この実施に際しては図書館の役割が非常に大きいものと感じている。学校や地域との連携をしっかりと行って啓蒙活動に繋げてほしい。現在課題と考えているのは図書館を利用する家庭は言わなくても利用するが、利用しない家族は全く利用しない、という二極化が生じている点である。子どもは親が連れて行ってくれないと図書館へ行くことができないため、そうした家庭の子でも本に触れる機会を増やしていきたいと考えているため、親が図書館へ足を運びやすい仕掛けづくりを考えてほしい。また、共働きなどで忙しい家庭では学童保育の利用が非常に多い。このような学校外での時間で本に触れる機会を作るためにも、図書館と学童とでの連携を行ってほしい。

先ほどのアンケート関連の話題に関して、例えばお母さん方などを対象にしたグループインタビューを実施し、意見を引き上げることができれば利用しやすい図書館づくりのためのヒントが得られるのではないかと思う。

また、協議会のメンバーを見ると教育関係者が多いように感じるが、実業界からも委員を取り入れてもよいのではないかと感じている。図書館の利用については読書のほか、情報収集をして事業運営や企画の参考にするといったものもあるため、商工会議所と連携し、ビジネス支援を行う取り組みなどがあっても面白いと思う。

外部機関との連携に関しては、病院との連携も効果的であると考えている。入院中は本を読みたくても入手しづらい環境にあるため、アタゴオルなどを利用して読書の機会を提供することもできるのではないかと思う。

最後に、他の図書館の事例について、兵庫県西脇市の図書館は大人向けの読書通帳を導入することにより利用者数を4倍に伸ばしている。また、岡山県立図書館は平成16年の開館以後、来館者数・貸出冊数日本一を保っている図書館であるが、この館でも講座など様々な取り組みを行っているようである。館内での企画作成の際に、こうした他館の事例を参考にすることも効果的であると考えている。

(事務局) 家読に関して、普段図書館へ行かない家庭に対し足を運んでもらう方法として、今回スタンプラリーを行った。これ以外のアイデアを出していただき、学校と手を携えて家読の推進を図っていきたい。学童に関してはアタゴオルの巡回を継続的に行っている。一層連携を強めていく方法を模索したい。協議会の人選について、商工会議所と連携を深め進めていきたい。以前SDGsの特集を組んだ際、実業界の方々から意見を頂いた事例もあった。

病院との連携については、市立病院に相談した。院内ではボランティアの方々による本の提供なども行っており、本を読むことに対する要望が強いと推測される。貸し出しを実施する上で本の管理が課題となると思うが、病院と連携して実施の可能性を探りたい。

7.閉会（事務局）